

宗教を研究するということ

橋爪大三郎

(東京工業大学教授・社会学)

宗教とは何ですか、とよく質問される。

正確に答えようとすると、むずかしい。

最近は何んどうなので、つぎのように答えることにしている。

「宗教とは、OSなのです」

理工系の学生諸君には、これがわかりやすいらしい。

「皆さんの頭は、バイオ・コンピュータ。生まれたときは真っ白で、使いものになりません。それを動かすには、OS (オペレーティング・システム) をインストールする必要がある。それが宗教。一神教、ヒンドゥー教、儒教と、OSにもいろいろある。どれをインストールするかによって、世界の見え方や本人の行動様式が、まるで違ってくるのです」

皆、なるほどとうなずく。そこでさらに続ける。

「一神教と言えばユダヤ教、キリスト教、イスラム教ですが、これらはヴァージョン1、2、3にあたります。このうちヴァージョン2が、世界のデファクト・スタンダード (WINDOW S 95) になっている。一方宗教について何にも知らない皆さん

のOSは、PC 98みたいなもの。このままでは先行きも危うい。いまさら手持ちのOSを捨てなさい、とは言いません。せめて宗教について理解を深め、世界標準互換機になってください」

日本人は、宗教をよく知らない。おまけに、宗教に偏見を抱いている。しかも、そうしたことに気づいていない。これは悲しむべきことではなからうか。

たいていの日本人は、「宗教がなくても生きていける」と思っている。宗教に関心がない。宗教を聞かれれば「無宗教」と答え、自分の家の宗旨も知らない人がいっぱいいる。

「宗教がなくても生きていける」のなら、「宗教がなくては生きていけない」のは、憐れむべき弱者ということになる。苦しむときの神頼み。よくよくの悩みを抱えている人が、宗教に助けを求める。まともな人間には、宗教など必要ない。こういう感覚があるので、キリスト教やイスラム教などの世界宗教が、広く信じられていることが不思議になる。

日本人は、「人間はなぜ宗教を信じるのだろうか」「宗教にはまると怖い」と考える。しかし世界の人は、「日本人はなぜ宗教を信じないのか」「宗教なしでどのように生きていけるのだろうか」と考える。後者のほうこそ、常識というものなのだ。

日本以外の場所では、宗教は、生きていくために欠くことのできないものである。だから人びとは、宗教に対して真剣である。いっぽう日本では、宗教がなくても生きていける。だから人びとも宗教に対して、いい加減である。

日本人のこうした、宗教に対する独特の態度は、これまで日本社会がたどってきた歴史に根ざしている。日本列島は、過酷な民族抗争が起こらなかった地上でもまれな場所である。過酷な宗教紛争が起こらなかった場所でもある。そのため日本人は、日本以外の場所で宗教がどれほど重要な意味をもっているか、想像しにくくなっている。

宗教は、人類文明の根幹だった。政治、法律、経済、文化などあらゆる制度が、宗教を軸にかたちづくられてきた。この事実をしっかりと認識すること。マックス・ウェーバーの社会学も、ここから出発したのである。

宗教はなぜ、文明の根幹となりえたのか？

それは、宗教が、連帯 (solidarity) をうみだすからだ。

民族抗争が続くメソポタミアや中国の平原で、城壁をめぐらした都市に住み、その守護神をいただくことは、生死を共にする運命共同体の一員となることだった。異民族との戦いに敗れ

ルールが組み合わさったもの。エートス (Ethos) は、それを支える人びとの行動様式。人びとのエートスが制度をかたちづくりに、制度が逆に人びとのエートスを育てる。制度とエートスが互いを再生産しあうことで、社会構造は維持されている。

近代の制度は、企業や市場や議会や官庁や裁判所や学校や軍隊や報道機関や……からなる。近代のエートスは、契約を守り、禁欲的で、合理的で、家族を愛し、人権を尊重し、……といった態度をいう。これらのエートスは、キリスト教を母体に見出された。ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、それを裏づけた古典である。また、近代の制度も、キリスト教文明の産物である。キリスト教は、近代社会の社会構造を与えたと言ってよい。

制度とエートスが噛み合って、社会構造が維持される。これが通常のあり方である。しかし、そうならない場合もある。たとえば、キリスト教文明と関係なかった社会がいきなり近代化しようとする時、エートスのないところに制度を導入せざるを

れば、全滅も覚悟しなければならなかった。異民族に対する優位を示すために、いやが上にも自民族の文化的アイデンティティを強調しなければならぬ。

この点もつとも成功したのは、古代ユダヤ教だった。古代ユダヤ教は、人びとがどのように生活すべきかをマニュアル化し、テキストに編成し、神に対する神聖な義務とした。食物規制や儀礼や安息日は、第三者の目に視える。そこでこれらを標識にすれば、強固に連帯した集団を形成できる (イスラム教も、このやり方を受け継いでいる)。

キリスト教は、日常生活をマニュアル化し神への義務とするやり方 (律法) をやめて、多くの異なる民族に流布できるスタイルに転換した。それでも、人びとのあいだに連帯をうみだすという宗教の基本的機能は保たれた。それを基盤に、末期のローマ帝国やヨーロッパの中世、近代が営まれてきた。

宗教とは、言い換えれば、ある社会の社会構造 (social structure) である。

社会は、多くの人びとのさまざまな行為が連結したシステムである。それは複雑で、変化しつづけているが、それはまったくのカオスではなく、そこに何らかの秩序が見つかる。その秩序、すなわち、社会の相対的に不変な部分 (安定した相互行為のパターン) を、社会構造という。

社会構造をさらに詳しくみると、それは、制度とエートスからなっている。制度 (institution) は、その社会に独特の組織や

えない。日本のケースが、まさしくこれである。

江戸幕府はキリスト教を禁止し、宗教活動をきびしく制限していた。当時の制度やエートスは、西欧社会とまったく異なるものだった。そこへ黒船が現れて、江戸幕府は瓦解した。近代産業、軍隊、学校、……近代的な制度をひと揃い、急いでこしらえなければならなくなった。制度は、そっくり外国の真似をすれば、なんとかなる。しかし、エートスはそうはいかないので、出来あいの人びとの行動様式をちよつと修正するだけで済ませる。さいわい幕末に尊皇思想というものがあつた。これは一神教に似たところがあつた。そこで天皇制が、人びとに、近代化に必要なエートスの基盤を提供することになった。

天皇制は、日本の近代化を進めるための、宗教 (キリスト教) の機能的等価物 (functional equivalent) であつた。それは間に合わせの、宗教まがいのつぎはぎである。そして、議会が機能しない、軍部が暴走する、などの副作用をもたらした。その結果、一九四五年に破局を迎え、解体された。

●日本人のアジア観の誤謬を歴史的に検証 現代東アジア論の視座

小杉尅次著
A5判・(税別)四七〇〇円
二一世紀の共生社会の創造へ向けて現代の誤ったアジア観を糾す。

●執筆二二年前の長編小説/翻訳成る 華嚴経

高銀ラウ／二枝壽勝訳
菊判・(税別)三八〇〇円
韓国を代表する詩人「高銀」の長編小説。南巡童子善財の求道の遍歴。

好評書

●第32回、日本翻訳出版文化賞受賞！ 韓国の民族文学論

東アジアの連帯を求めて
崔元植チウワンシク／青柳優子編訳
A5判・(税別)三〇〇〇円
アジア各国で進む近代史・文学史のつらなわしの波を伝える訳業。

●全体像を提示した本格的な初めての研究書 韓国女性文学研究 I

青柳優子著
A5変・(税別)三四〇〇円
植民地時代からの女性文学を概観し、さらに差敬愛の代表作を考察する。

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
TEL03-5684-0751 FAX03-5684-0753

1998年9月1日

がんばろう! 日本!!

国家衰亡の危機、 政党と主権者はどうあるべきか

10・10集会

と き：10月10日(土・祝) 午後1時(開会)

と ころ：ニッショーホール

(地下鉄銀座線「虎ノ門」3番出口 徒歩3分)

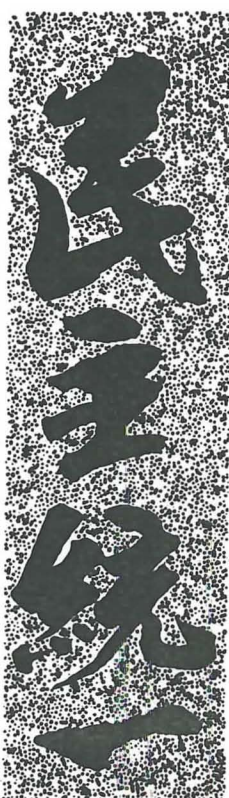
参加費：2000円

第一部「国家衰亡の危機、政党と主権者はどうあるべきか」

- ・基調 戸田政康 (民主統一同盟、フォーラム地球政治21(準)代表)
- ・講演 中西輝政 (京都大学教授)
- ・講演 小沢一郎 (自由党党首(要請中))

第二部「抜本的改革の政党とその支持基盤を、どこからどのようにつuckingしていくのか」パネルディスカッション

- パネラー／東 祥三 (衆院議員・自由党副幹事長)
 枝野幸男 (衆院議員・民主党政策調査筆頭副会長)
 田中 甲 (衆院議員・民主党国民運動本部長代理)
 中村敦夫 (参院議員)
 錦織 淳 (前衆院議員・首相補佐) 五十音順・敬称略
- コメンテーター／橋爪大三郎(東京工業大学教授)



第233号

民主統一同盟
機関紙

戦前の天皇制は、こうした問題をはらんでいたが、それは戦後社会にも影を落としている。天皇制が解体したあとに、エイトスの空白が生じた。そしてその空白は、簡単に埋まらなかった。日本では伝統的に、宗教は、公共の領域と切り離されている。したがって、公共的なエイトスをうみだす役割を果たせない。そうしたエイトスの空白(しつけと教育の失敗)が、最近ますます明らかになっている。

エイトスの空白は、アノミー(無連帯)と言い換えてもよい。この空白は、国家が完全に世俗の機関(人びとのコントロールのもとにおかれる組織)となるいっぽう、家族と地域社会が教育力(エイトスの形成能力)を回復する日まで、続くはずだ。

近代天皇制の特徴は、国家(世俗の機関)が、同時に教会(神聖な献身の対象)を兼ねているところにある。

このメカニズムは、明治はじめの廃仏毀釈(神仏分離、ならびに、国家神道の発明にもとづいている。そのうえで政府は、国家神道は宗教ではない、という公式見解を発表した。宗教でないから、国民が仏教徒であろうとキリスト教徒であろうと、全員に強制することができる。戦前も、政教分離(国家と教会の分離)が原則であったが、それは、国家をもうひとつの教会とするためであった。

このような体制のもとでは、民主主義も、市場経済も、正常に機能できない。

世界宗教のうち、仏教と儒教だけは、長い時間をかけて日本社会に根を下ろしてきた。しかしその本質は、誤解され、日本人に都合のよいように書き換えられてきた。そのほかの宗教にいたっては、ごく表面的にしか知られていない。

世界の宗教について、正確な知識をうることは、世界の人びとがどのような原理にもとづいて行動しているのかを理解するための、基本である。そして、エイトスの空白を抱え、近代化のつぎのステップを踏み出せずにいるいまの日本社会にとって、不可欠の作業であろう。

中村元博士は、わが国の仏教学の伝統を踏まえつつ、その枠を超えた国際的な視野のもとに仕事をされた。その業績は、仏典の正確な読解を踏まえつつ、比較宗教、比較文明、現代思想など人文社会科学のあらゆる領域に及ぶ。

中村元博士の業績の価値を、よく分かっていない日本人が多すぎるのではないか。もちろん博士が、立派な学者であるとは思っている。でも、それでおしまい。博士の業績が、いま日本が直面している諸問題——教育(エイトス)の立て直し、東アジアの平和や安定、21世紀の世界秩序の構築に役立つとは思っていないのだ。

そこでこれから必要なことは、博士の業績を、現実的・具体的な日々の問題に翻訳し、役立てていくことである。それには、宗教に理解のある、多くの分野の専門家の協力が必要だろう。そういう共同作業のための土俵を与えてくれるのが、中村元選集なのである。